

日本遺産認定から一年

たたら 記憶を訪ねて



砂鉄を採取したかんな流し技術で造られた東比田地区の棚田。

古来、市内各地で営まれてきた「たたら製鉄」は安来の文化・産業などに大きく影響を与えています。日本遺産認定から一年、市内各地に残るたたら面の面影を改めて訪ねました。

宇波の鑄物

五百年続いた伝統技術

宇波で作られた清水寺の九輪

古くから広瀬では鉄を生み出すたたら場が多く営まれていました。鉄の用途は主に二つに分けられます。鉄を熱し、たたいて刀剣などをつくる鍛造と、鉄を溶かし砂や粘土などで作った型に入れなべなど道具を作る鑄造です。宇波は鑄物の一大生産地として名をはせました。

宇波の鑄物は特に出雲地方で普及し、武具や民具など年間3千〜7千個を生産。また、銅鐘、鰐口などの仏具は、音色、容姿ともに優れたため、中国地方を中心に100力以上へ供出されました。

鑄物の歴史は、1458年に河内国（現在の大阪府）から鑄

物師が入村して始まりました。戦国大名尼子氏の庇護を受け、生産性の高い武具や農具を生産し、尼子氏隆盛の一役を担いました。鑄物製造には、不純物の少ない良質な鉄、火力を強くするための白炭、粘りがあり耐久性の強い粘土が必要で、これらすべてが宇波近辺にあり、上質な鑄物を生産し続けました。

空が真っ赤に

広瀬地区に住む細田潔司さんの実家は、昭和23年まで宇波で鑄物工場を営んでいました。

「炉に火をつける日は地区から手伝いを頼み、総出で行きました。工場内を人が忙しく行き交い、朝から祭りのようににぎ

伯太とたたら

強いたたらとのつながり

やかでした。操業が始まると夜遅くまで鉄を熱し続けます。夜は炎が雲に反射して空が真っ赤に見えました。この赤雲は安来からも見え、次の日にその雲を見た商人が鉄物の買い付けに来ていました」

隆盛を誇った宇波の鋳物業でしたが、品質のよい燃料が手に入らなくなったのを機に、細田さんの工場が廃業し、約500年におよぶ鋳物の歴史に幕を閉じました。宇波で製作した鋳物の多くは、第二次世界大戦時に金属供出を余儀なくされ、今ではほとんど残っていませんが、市内では清水寺三重塔の九輪、雲樹寺の銅鐘などがその美しい姿を今も誇っています。

昭和58年、宇波小学校で鋳物作りを再現したときの様子。

伯太も、たたらが強く関わっています。赤屋や井尻などには、古代から近世まで小規模なたたら場が造られ、鉄が生産されました。赤屋村史によると赤屋地域内の野だたらは73カ所と記されています。

江戸時代、母里藩は鉄を積極的に活用します。母里藩主は江戸定住が幕府に許され、多額な費用が必要な参勤交代こそありませんでしたが、江戸に多くの家臣を養っていました。年々、江戸の費用がかさみ、三代目松平直員公の時代から幕末まで慢性的に困窮します。その間、藩の財政を支えたのが鉄でした。

藩を支えた母里鉄

財政再建を担った藩内の御用商人は、隣接する伯耆国の鉄に目をつけます。商人は、印賀や阿毘縁など伯耆国の有名産地から優良な鉄を買い集め、母里を通して安来へ運び、北前船などにより大坂（大阪府）や越後（新潟県）、若狭（福井県）などで売りました。この

鉄は母里鉄とも呼ばれ、全国の市場で高く取引され、大きな利益を上げます。取引は幕末まで続き、藩の財政を支えました。

安来の町で鉄問屋の長男であった永井瓢齋が描いた鉄問屋絵図には、製鉄が盛んだった広瀬の倉の近くに同じ規模の母里倉が描かれています。これは母里から多くの鉄が運ばれていたことを物語っています。伯太にある当時の街道には今でも六地藏や石碑が見られ、数百年の間、たたらを載せた牛馬が伯耆から母里そして安来へと頻繁に往来したことが伺えます。

母里交流センター前館長・稲田郷さんは「伯太は、近隣と同じく良質な砂鉄、豊富な樹木に恵まれ、古くからたたらを営んできました。炭を得るため開発された森林やかなな流しの跡は、新田にするなど、人々の生活を豊かにしました。また、江戸時代の交易の中で多くの人々が交流し、文化が育まれ、今の伯太が形作られてきました」と、伯太にとってたたらは不可欠なものであったと話します。

鉄が往来した長江峠は登り下りの2路線構造。



赤屋地区に残るかな残丘。丘陵を削り生み出された風景です。



(右) 毎年8月14日に比田地区では「豊年比田踊り大会」が開かれます。
 (下) 比田小学校では比田踊りの口説の授業が行われ、子どもたちに地域の伝統が継承されています。



比田踊り

受け継がれる市の無形文化財

比田地区で親しまれる比田踊りは、中世から原型に近い形で受け継がれている踊りと言われ、市の無形文化財に指定されています。太鼓や三味線などの鳴り物がなく、「口説」といわれる唄い手と、口説を盛り立てる声の「囃子手」のみが、音頭を生み出すこと。そして、「ばんばら」「やまづくし」「こだいじ」の三つの口説と呼ばれる唄で構成される踊りが特徴です。

踊りの中心を担う「口説」は、最も重要な役です。踊り手を見ながら口説を変え、盛り上げていきます。踊り手も見事なもので「口説」が行う唄の切り替えも音頭を止めることなく、踊り続けます。決して派手な踊りではないですが、素朴で哀愁を帯びた踊りです。

比田踊りには金屋子神社にまつわる「安倍屋口説」や「家島口説」のような地域独自の文句が存在し、たたらとの深い関係が伺えます。

ルーツはたたら？

比田地区は、昔から鉄の神さまを祀る金屋子神社の門前町と

して栄えました。一月にもおよぶ同神社の例祭には、全国から鉄の関係者など年間数万人の参詣客が訪れ、旅芸人による見世物小屋などが建つほどにぎわいました。旅芸人は、近隣に点在したたたら山の山内にも多く出入りしていました。

この背景が独特な比田踊りを成立させたと比田踊り保存会の小池清水さんは推察します。「比田と奥出雲町横田の盆踊

りは酷似しています。また、岡山県新見市には横田という踊りがあります。これら地域はすべてたたら場がありまし

た。この地域に住み着いた旅芸人たちがおり、今日に伝わる独特な比田踊りを完成させ、そして、近隣地域に伝播していったのではないのでしょうか。たたら繁栄は地域の独自文化を育み、今に伝えます。

ハガネの町安来

鉄の積み出し港のにぎわい

七つ下があれば安来馬が戻る
馬の鈴の音 足拍子

唄は安来節の一節で、山間のたたら場から安来への鉄運搬の様子を唄ったものです。「七つ」というのは午後4時頃で、多くの馬が頻繁に行き来したことを表しています。

安来は古くから鉄の積み出し



務める口説、長年、小池清水さん

港として栄えました。伯耆や出雲で生み出された鉄の多くは安来へ集積されました。当時、旧山陰道から北に折れ、安来港に向かう西灘の通りには、問屋街が形成され、鉄をはじめ米や蠟、木綿など多くのものが集まり、大変にぎやかでした。安来に運ばれた鉄は美保関を経由して、大阪、新潟、福井などの刃



(上) 鉄の流通で栄えた安来の町並み。
 (右) 日立金属株式会社安来工場の敷地内にある金屋子神社。
 (左下) 西灘町の相坂さんのご自宅にある金屋子さん。



物産地に運ばれました。

西灘町で鉄問屋を営んでいた子孫・相坂末年子さんのお宅には、今も金屋子さんが祀られています。「自宅に下宿していた人が鳥上（奥出雲町）に行き来していたので、その関係で祀られたのではないかと思います」。鉄が安来の商人にとつて重要なものであったと想像できます。

積出港から生産地へ


明治時代になると洋式製鉄技術による生産が普及し、たたらによつてにぎわっていた安来の町にもかげりができず。

これを危惧したたたら関係者らが明治32年雲伯鉄鋼合資会社を設立し、安来の町でたたら製品の製造・販売を手掛けます。この会社が現在の日立金属株式会社安来工場の前身になります。

す。

現在、同社山手工場内の小高い山には、工場を見守るように金屋子神社が祀られています。傍らには、金屋子神が降り立つたといわれるカツラの木と約300年前のケラが供えられています。社員の皆さんが訪れる場所、明治37年に分祀されて以来、工場の守護神として大切に祀られています。

同社安来工場の広報担当者は、「たたらは安来工場のルーツです。日本刀、たたら製鉄に通じる『誠実生美鋼（誠実美鋼を生む）』の精神は、鋼づくりに携わる私たちの工場訓であり、一人一人の真心こそが良い鋼を創り出して行くものと考えています」と、たたら精神は現在に継承されています。



**安来のまち歩き
ガイドブック作成**

安来町周辺のたたら旧跡や言い伝えをまとめたマップ「たたら製鉄と港町やすぎ」が作成されました。マップでは、たたらで栄えた安来港の歴史や周辺の観光施設など12カ所を紹介。観光協会や道の駅などに設置され、ガイドブックとして活用できます。

作成した安来市まちづくり協議会の石倉貞文会長は、「マップを手に町を歩いて安来の歴史を改めて知ってほしい」と話していました。